愛楽園・澄井小中学校の記憶

― 24 年間の教師生活をとおして―

比嘉　良行

はじめに

皆さんのお手元に、戦前の 1939 年設置の愛楽学園、のちに 1951 年設立の琉球政府立澄井小中学校、1972 年に沖縄県立那覇養護学校澄井分校となった学校、ここでは澄井校と呼びます、の沿革や生徒数についてプリントしたものを 2 枚お配りしました。澄井校がどんな学校だったのか、ということをプリントに沿いながら説明していきます。愛楽園の創設は、1938 年 11 月です。これは宮古島にある南静園よりも遅いのです。本土の療養所よりも、かなり遅く設立されたのです。かなり遅くということは、反対運動が多くて、療養所が作れなかったのです。このあたりの問題は、『選ばれた島』という青木恵哉さんが出した本がありますので、それを読んでください。そうすると、初期の頃の人たちは、「らい」をどのように見ていたのか、そういうなかで「らい」患者の人たちはどのように思ったか、なぜ「らい」が迫害されていったのか、このへんもよく分かると思います。

澄井小中学校設立の経緯

時代は、太平洋戦争が始まる直前ですね。1938 年 11 月に愛楽園ができました。設立して 2 ヶ月後の 1939 年 1 月からすぐに子どもたち、学齢児童を教育しなくてはならない、と愛楽園初代園長の塩沼英之介先生は考えました。そして、いわゆる“愛楽園園長立”の学校「愛楽学園」ができた。生徒は 17 名でした。愛楽園ができて 5 ヶ年後の 1944 年には入園者数も増えて、入園者が自治会を作りました。自治会ができた時点で、園長先生は学校の運営を自治会に委託し、自治会が運営するようになったのです。

その年、1944 年、戦争が始まって愛楽園は空襲にあいます。園内のあちらこちらで建物が壊れた。今でこそ、戦争の傷跡は無くなりましたが、職員住宅の横のコンクリート壁、そこにはまだ弾痕が残っています。よく見ると一寸間隔で塀に弾があたり、穴があいたのが今でも分かります。その頃は、2 代目園長の早田皓先生が、戦争が近いからと、入園者に壕堀りを一生懸命やらせ、避難所を作らせた。避難壕のあとは、今もあちこちにありますが、ほとんどが埋まってしまいました。この避難壕があったため、戦争の爆撃による患者の死亡はなかった。だけども、患者に言わせれば、その時毎日、つるはしをもって作業し、傷をつくってしまった。しかも治療が十分できなかったために、重度の障害になった人がたくさん出ました。

その後、アメリカ軍がすぐに上陸してきました。そして愛楽園を見たら、兵舎はない。日本兵がいた様子も無い。やがて「らい」の病院だった、療養所だったということが分かった。するとアメリカ軍は戦争を続けながら、療養中の患者に食料を与えたりして、愛楽園の「復興」をアメリカ軍が始めました。

1951 年には、愛楽園内に私立の学校が設立されました。しかし小学校と中学校は義務教育なので、本来はその地域の町村が作るのです。地域の町村が作るのが規則なので、愛楽園の自治会の人たちは、本土の療養所と同じように、地域の公立学校で、ここの子どもも教育してほしい、と村に嘆願しました。しかし、屋我地村は断ってきました。なんで断ったか。療養所と同じ学校の校名が使われたら、屋我地村の学校の卒業生は皆「らい」だと混同される。これがひとつ。もう一つは、療養所の子どもは屋我地の子どもではないのに、屋我地が財政負担をするというのが嫌だった。そういうことで拒否されました。拒否されたので、当時の琉球民政府に学校を作って欲しいとお願いをしました。

その時の教育の長は、屋良朝苗さん、のちに選挙で選ばれ、最初の沖縄県知事になった方だった。屋良さんは、陳情のとき、地元の屋我地村が受け付けてくれないと言ったら、「じゃぁ僕が受け付ける」と受領してくれ、

澄井校は政府直轄の学校となりました。当時の政府は、国なのか、県なのかという問題があった。当時の沖縄は、戦後すぐ、アメリカの占領のもと、軍政府の下に琉球政府がありました。それは、国の仕事も県の仕事も両方ミックスしたような政府でした。そして、そこの長が、直接じゃぁ僕が引き受けるって言い、公認となったのです。

その学校は、教員3名を政府が任命しました。3名のうち1名は入園者でした。その入園者は師範学校を卒業して、どこかの学校で先生をやっている時に発病して愛楽園に入園していました。こういう人がいたので、この人を教員のひとりにしよう、と採用しました。そしてこの人には、当然教員としての給料を支払うわけです。普通の先生と同じ基準の給料を支払うのは当然のことでしょう。しかし、この方は、患者ですから、衣食住はすべて政府によって保障されている。ですからこの方の給料は、愛楽園自治会の収入とし、自治会役員の給与や、園内で労働する他の患者の給与レベルにあわせて給料を支払うことになりました。すると、政府から支払われる給与の額面と実際の手取りとの差額が残ることになる。この差額を自治会が貯めておき、学校の教育予算にしました。ところが、年度が進むにつれて、患者を公務員として採用することについて問題が生じてきます。同時に、学校経営に必要な備品などは、当然政府が負担すべきという問題も起きてきました。

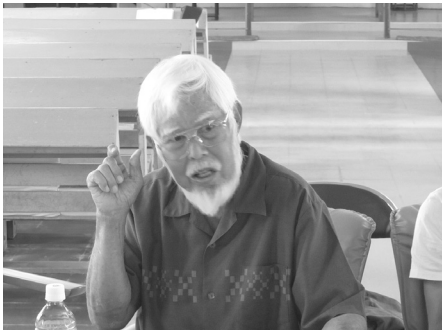


写真1　比嘉良行氏

澄井小中学校に着任

1957年に、当初からの先生方を解任することになります。患者の先生も解任されました。後任に、安田徳太郎先生が来ました。この先生は、師範学校を卒業して、当時の水産高校の先生をしていました。その先生が、

定年になってから愛楽園の事務職員になって勤務していた。定年になった人だけれども、この先生を採用したわけです。そして同じく1957年に私が着任することになりました。当時、私は琉球政府の統計局にいました。ここで働いていたときに、「愛楽園には、学校はあるが、教師になってくれる人がいない。比嘉さん、教師をやってくれないか。愛楽園で働いてくれ」と言われました。私は、「そんなに困っているのであれば、新しい人が来るまで働きます」と返事をしたのです。というのは、個人的なことですが、戦後、私の村では同じ歳の人が3名だけ生き残ったのです。他はみな、戦争で死んでしまった。そこで私は、何をするべきか、戦後どうしたらいいか、と一生懸命考えていました。何か人のために、と。同級生はみんな戦死したので、そういう気持ちがあったものですから、今は政府で働いているけれど、暇を貰って、新しい先生が来るまでは愛楽園で働こうと思ったのです。だから、4月ではなくて6月着任になっているのです。学校に赴任するにあたって、校長にひとつだけ条件を付けました。それは「事務は一切、やりませんよ」ということでした。校長はそれを認めてくれました。しかし、一般的に学校には事務職員がいますが、澄井校にはいませんでした。長らく小中学校で勤務していた校長は、当然、事務のことは分からないわけです。私は校長に「事務はやらんよー」と言いましたが、校長は予算書や決算書を作ったり、会計監査を受ける準備もしなくてはならず、本当に困っていた様子でした。それを見て、私は「ちょっと、手伝いましょう」と言ったわけです。そうしたら、結果的には全部、自分がやるような羽目になってしまいました。

私が学校で働くようになった1957年は生徒数が56名でした。それを3名の教師で担当することになりました。私が着任して少し経ったころに、ある中学1年生の生徒が小学生をいじめている現場を見つけました。そこで、その生徒を呼んで、「小学生をいじめるようなことは、やってはいけないよ」と諭しました。そうしたらその生徒は、ワンワン泣き出して、とっても悔しいと言うんです。どうしてって訊いたら「僕は、今まで散々やら

れてきたんだ」と。そして中学生になって、今度は僕がやってやる番だと思っていたら、先生が来て、やるな、と言われた。それが悔しいって言うんですね。そしてワンワン泣くんです。その時、私は、人間は虐げられた小さな社会の中に閉じ込められると、心が悪くなる、と思いました。この生徒のような人が生まれてしまう、ということです。いじめられた子が、いじめをするということは、ある程度は知っていましたが、目の当たりにしました。ところで、愛楽園ができたとき、園内には監禁室という牢屋みたいなものがありました。いわば監獄ですね。そして園長には患者を監禁室に入れる権限が「らい予防法」という法律上、ありました。

このようなわけで、澄井校に赴任してすぐに、先ほどの生徒の行為を見たので、「ああ、ここでもいじめはあるのか」と思いました。この生徒と話をしていると、「先生、この学校にはね、運動する道具や設備が何も無い。心はいつも荒れているんだ」と言うのです。私は、そうか、と。普通の学校であれば、運動道具などは、学校に備わっている。ＰＴＡなどがお金を出して用意することもある。しかし、ここにはＰＴＡも無いのです。ですから、私は子どもたちが運動できるように、すぐにバスケットボールのゴールスタンドを手作りしました。

なぜ、進学指導に力を入れたか

ところで、皆さんは、岡山の愛生園というハンセン病療養所はご存じですか。愛生園は、日本で2番目に大きな療養所ということです。この療養所の中には、岡山県立邑久高等学校定時制の分校、新良田（にいらだ）教室があります。1955年、昭和30年にできました。ハンセン病の患者で、療養所に居ながら高等学校の教育が受けられるようになったわけです。当然、愛楽園にもこの情報が入ってきました。そうすると子どもたちの欲求をなんとか満たしてあげたくなる。私は、「子どもたちは、もっと高い希望を持って生きていかなくてはならない。そのためには、子どもの学力向上と人間形成を考え、楽しい学校生活を過ごせるようにする」、これをモットーとして教

師をやってきました。着任当初は、この学校の生徒の成績は、全体的に低いものとみんな考えていた。事実だったかもしれないが、とにかく学力を高めようと思いました。そして学校名が屋我地小中学校の分校ではなく、琉球政府立の「澄井小中学校」となった。ところで、澄井小中学校となって困ったことも出てきた。皆さん、何だと思いますか？それは、「澄井小中学校卒業」と履歴書に学校名を書くと、愛楽園にある学校に通っている、つまり「らい」だということが、分かる人が見れば分かってしまう訳です。本土のように町村にある本校の分校でしたら卒業証書に書かれる学校の名前は、その本校の校名になります。独立校になったために、良い面もたくさんあるけれども、このような悪い面も出てきました。澄井小中学校の卒業生は、元「らい」患者だということがすぐに分かってしまう。だから私は、学校の名前を余り外部に対して出すようなことはしなかった。例えば子どもが絵のコンテストに入選するとか、新聞に詩を投稿するとか、作文をコンクールに出すとかすると学校の名前を出さなくてはならないわけです。そうすると、迷惑するのは、その親たちです。「らい」という名で出たのと同じだ、と言うのです。だから努めて学校の名前を出さないようにしました。同時に、その子どもの最終学歴の学校名にはしたくなかった。最終学歴の校名、例えば、自分は澄井小中学校の卒業生ということを履歴書にはなるべく書かないで済むような形をとらなければいけないと努力しました。

だから、どんどん学力をつけて、少なくとも高校に行けるような学力はつけたいと考えたのです。子どもたちの学力をつけることに一生懸命になりました。夢中でやりました。そうすると、当然、高校受験ということが出てきます。自分は学力も十分についてきている、高校に行きたい。子どもたちはそう思うわけです。そこで、病気の良くなった生徒や3月までに退院できそうな生徒、特に中学校3年生で卒業と同時に退院ができそうな生徒たちを、医師と相談して受験の3ヶ月くらい前、12月初め頃までに退院してもらうことにしたのです。ドクターや事務所の職員と打合せをよ

くして。そうしたらまず、澄井小中学校が最終学歴にはならないで済みます。それから、愛楽園内には高校が無いから、転出して街中の高校を受験することができます。ところで当時の沖縄では、中学校は高校受験の願書に成績の序列を記入していました。学力が何番くらいで中学校を卒業したか、と。この順位によって希望する高校のランクも決まりました。ですから、12 月の初めまでには、愛楽園から出す。そして転校先の中学校で試験を受けて、序列の上位に入れるようにする。その時の序列が高くないと、なんで落とされたのか分からなくなる。落とす理由を高校側に与えることになるわけです。だから、学力をつけるということを一生懸命にやって来ました。

さて、資料に「伊波敏男 卒業」と書いてあります。あえてこの方の名前は出します。それは、伊波敏男さんは、現在たくさんの著作を執筆しているからです。自分の学校時代のこと、学校から逃げて高校に行く、愛生園にあった岡山県立邑久高校の新良田（にいらだ）教室に進学することなどを『花に逢はん』（日本放送出版協会、1997）に詳しく書いています。この本を読めば、当時の子どもたちの悩みが分かるでしょう。子どもたちのことがたくさん書かれています。読みやすい本ですので、是非読んでみて下さい。中学 3 年の時の彼は、背は小さいし、指は曲がっていて、傷からじくじくと汁が出るような状態の生徒でした。彼の同級生は、中学校 3 年の時には 8 名いました。彼はなんとしても新良田に行く、高校に行きたいと言っていました。しかし沖縄から岡山県にある新良田教室に行くということは、当時、外国に行くことと同じでパスポートが必要だったわけです。

ところで「らい」は国境を超えることができませんでした。沖縄の日本復帰前、日本政府は、結核患者は本土の結核病院で治療するが、ハンセン病患者に対しては沖縄の中で治療するように、ということでした。しかし、子どもたちを教育していると、どうしても高校に進学したい、行きたいという生徒がいる。私たちも行かせたいという気持ちが出てくる。そのために一生懸命学力をつけてきたわけですし、高校の情報なども提供するなど

してきたわけです。しかし、法律は国境を越えることを禁じている。このような状況の間で、最も悩んだのが伊波敏男なのです。彼以外の6名くらいの子どもたちは、後遺症が少ないから、何とかすれば行くことができるかなと思ったのですが、敏男は後遺症が本当にひどかったのです。あるとき、敏男は「僕は勉強やらない」って言い出したことがあった。中学生の頃は、とても難しい時期です。感情の変化が激しい時ですから。このような時期にあった彼は「もう僕は鉛筆がつかめない」ってノートをとらなくなった。私は、そうか、ということで、鉛筆を指に挟んで包帯で巻き付けた。それを休み時間ごとにやりました。作文も手から汁がでるので、字が読めなくなってしまう。そのくらい、汚してしまうわけです。私は昼間は子どもたちと一緒にいるから、忙しくて作文を読むことができない。だから、家に持ち帰って、読むわけです。そして子どもたちの作文に感想を赤ペンで書いたりしていました。敏男が、「もう勉強しないから」と言ったその時のことは、まだ覚えています。「人間ってね、顔かたちが綺麗だったら幸せになれるんだ」と。「顔が綺麗だったら、スターになれる。手先が良く動いたら、絵を描いたり何かを作ったり、幸せを掴むことができる。でも、自分は顔かたちも悪いし、手足もこんなだったら、あと残ったのは、死を選ぶか、頭をみがくか、二つのうちのどっちかだ。僕は顔かたちが悪い、手が悪い、でも頭さえしっかりしていれば、幸せは掴める」と言ったのです。それで、敏男は、再び勉強に打ち込み、今では本を何冊も書いたりするようになりました。

写真２　講演風景

学校環境の整備

さて、澄井校は、職員室や事務所を作ってもらうことができました。これは当時の琉球政府が小学校や中学校を作るとき、建設費の三分の一は地元が負担し、三分の二は国が補助するというような規則を作ろうとした。しかし、沖縄は地上戦と米軍の爆撃で、焼け野原となったところが多く、どの市町村も経済的に疲弊していました。そこで市町村長は琉球政府と交渉し、校舎や教室は、全部政府が作ること、教室以外の建造物は市町村で作る、と取り決めたわけです。ですから、教室はできたけれど、トイレがないということが起こりました。財政にゆとりのある町村はトイレだけでなく、職員室や事務室も作れました。しかし、財政的に逼迫している町村の学校は、トイレの周囲を米軍払い下げのテントで囲いをつくり、ドラム缶を地面に埋めただけというものもありました。もちろん、澄井校もトイレを作る予算は無い。行政は出してはくれないのです。だから遅い時期までドラム缶をひとつ埋めた男女共用のトイレでした。外からは見えるし、臭いはとてもじゃない、ひどかった。そういう時代でした。この状況のなかで、ある時、職員室とトイレを作ることを政府にお願いに行きました。すると政府は、政府予算では学校にトイレは作らないという取り決めがある。だから作ることはできない、と言うのです。しかし、その時の学校建設を担当する課の課長が、この学校に教室一棟を割り当てるという予算を組みました。しかし、実際は職員室とトイレを作った。当然、会計監査があったら、この課長さんはクビになったでしょうね。政府ですから毎年、監査はあります。指摘されれば当然解雇されるかもしれない。この課長さんは、後年、「僕は比嘉さんに自分のクビをあげたんだ」と言ってくださいました。本当に、彼には感謝しました。ここの学校は、当時、知事だった屋良さんが、自分が辞めることも覚悟して学校の設置を承認した。そして施設課長が自分の立場をかけて、ここにトイレを作ってくれた。子どもたちのことを考える大変ありがたい人がいて、学校が作られ、子どもたちを育ててくれた。私は、大変感謝しております。

高校受験から見える差別のまなざし

その頃、ある生徒が高等学校の受験に失敗してしまいました。彼の両親は愛楽園にいましたが、家は読谷村にあった。ですから、彼は読谷高校を受験したいと言っていた。そこで中学校3年の時に彼を読谷村の中学校に転校させたのです。彼は運動もできるし、後遺症も少なかった。園長は「軽快退園」という証明書を出しました。私は転校先の中学校には、園長の証明書の説明もし、彼が一生懸命、受験したいと頑張っていることも説明しました。そして中学校での成績をつけてもらい、高校を受験しました。しかし結果は不合格だった。あとで聞いたら、中学校での席次は2番だったのに、です。転校先は大規模な中学校でしたから、誰が見ても当然、無条件で合格するだけの学力はある。しかし高校入試の結果は、不合格でした。当然皆おかしいと言うわけです。それで、まず最初に中学校の校長が高校に行って、「どうして不合格となったのか」と尋ねました。すると高校側は、「総合点が低かったから不合格とした」と。しかしです、彼は、勉強はできる、席次もいつも1番か2番。運動もできるスポーツマン。そして非常に礼儀正しい。非の打ち所が無いような少年でした。高校側は、中学校校長の追求に対して、はっきりとしたことは言いませんでした。しかし、その理由は、愛楽園園長の出した退園証明書にあったのです。園長は「完治」と書かず、「軽快」と書いた。なぜ、完治と書かなかったのかと、あとで聞いたところ、それは医学的見解なのだそうです。結核などは手術をしたら、完治とは言わないそうです。傷跡が残ったりしますので、完治ではないのだと。こんなトラブルで気を揉んでいたとき、ある私立の高校が、うちに来いと言ってくれました。そして彼はその高校に進学しました。入学してから卒業するまで、成績はずっと1番、総代として卒業しました。またスポーツの面でも力を発揮し、1964年の東京オリンピックの聖火リレーが沖縄でもあったわけですが、その聖火リレーの読谷村代表として走りました。今も元気に働いています。彼については、愛楽園交流会館で記録を作成しています。機会があったら、目を通してみるといいでしょう。

それから1961年に、本土の療養所の中にある小中校の生徒たちが極端に少なくなる。それに反して、こちらの学校から本土の学校に転校していくのが多くなる。例えば、先ほど話したように高校受験のために、早めに渡って行こうとするのです。中学校の卒業を待たないで、早めに行くのです。中学校の1年、2年で本土に行ってしまうのです。当時の本土の療養所内にある小学校中学校は、児童生徒数が減っているので受け入れやすいという状況もありました。1961年頃は、受け入れる本土の療養所にある学校は、積極的に生徒募集のために、こちらまで来るようになりました。療養所の中の学校に生徒を入れないと学校そのものが続かなくなると考えていたわけです。それで、愛楽園まで生徒募集に来ていました。長島愛生園の高校、新良田分校も生徒数が減っていました。最初は受験者が60名、1学年35名くらいいたのですが、1961年頃からどんどん減っていきました。

この1961年には、学校の色々な制度も整ってきました。初代校長や二代目校長、皆さん定年を遙かに過ぎていました。そこで法の整備のなかで、規則にあうように定年60歳制を導入することになったわけです。そうなると、安田校長も解任となります。今度は現役の校長を探さなくてはならなくなりました。この当時、校長になってくれる人がいなくて、1961年に安田校長が退職し、次の校長が着任するまで8ヶ月ほど空白があります。教育長は次の校長を探しても、断られる。任命しきれない。皆さん現役の教員ですから、自分の地元で教員をしたい、校長をしたいわけです。屋我地まで来てくれる人はいなかったのです。この間、私は、「次の校長は教育長が決めきれないから、君が探してくれ」と言われたのです。それで、私もあちこちと校長候補を探しました。

1964年頃になると、沖縄出身の子どもたちが、本土の新良田教室を目指して行きました。これは、いわば不法に本土の療養所に行くということでもあります。しかし、政府に分からないはずが無いです。正規の手続きをしないままで、本土の療養所に入るのですから。しかし本土の療養所は、法律によって門前払いしてはいけない、ということになっていました。「ら

い」患者が、病院にきて「私を診察してくれ」と医師に言ったら「ここは満員なので入れられません」と言ってはならなかったのです。必ず収容しなくてはならなかった。追い返してはいけなかったのです。だから愛楽園から正規の手続きをしなくても、本土の療養所の門を叩けば、何とか入れて貰えた。それで、沖縄の高校に在学中に発病すると、ドクターは、すぐに私のところにその生徒の教育のことを相談に来るようになりました。私は、愛楽園にいったん入って、来年4月に本土に行くという方法がある、また、すぐに直接、本土に渡って療養所の門を叩くという方法もあるなどといくつかの方法を教えました。すると、多くの場合は、愛楽園に入るということは地元や近所に知れ渡る、と言うのです。同級生にも知られてしまう。あいつは「らい」だ、と。だから大概は、本土の療養所に行きなさいね、そこで門を叩きなさいね、と言いました。年間にすると相当な数になりますが、沖縄から本土に渡っていきました。すると、政府もこれ以上黙認することができなくなってきました。1964年頃になると、今度は沖縄で、本土の高校入試現地試験を実施することになりました。試験官が問題を持ってこちらに来ました。第1回目に試験問題を持参して出張してきたのは岡山県の教育庁の関係者でした。当時、アメリカ占領下にあった沖縄は、本土からすれば外国でしたので、試験官はパスポートを所持して来ました。試験の結果、合格者が出ました。すると、その生徒は日本政府と琉球政府の責任で、岡山に送り届けなくてはなりません。そこでまた、問題が生じました。政府間では、当然、合格した患者である生徒は岡山で受け入れることを決めます。しかし政府間で決めても、現場が動かないのです。例えば、当時、沖縄から岡山に行くのには、船で神戸まで行きました。その第1回目、何が起こるか分からないから、私も生徒と一緒に行きました。学校の先生が卒業生を引率して、出張するということは、本来ありえない。卒業式が終わったら、生徒は卒業生であり、学校とは一線を画さなくてはならないというのが、学校の制度です。ですから、私が卒業生、元生徒ですね、の引率のため出張を申請しても、教育庁は法的にそれはでき

ないという回答でした。ならば私は、自費で行きますと言って引率しました。当時、「らい」は伝染病ということになっていましたので、その生徒を隔離して連れて行かなくてはなりませんでした。そして隔離するのに都合がいいのが、一等客室でした。船の一等客室をひと部屋借り切るのです。そして船が出航の時間になりました。しかし船は出港しません。船会社や船長は、「らい」患者が乗船していることを分かっている。そして、それを嫌がっている。「らい」患者と分かりながら、外国に行くのですからね。そう思っても仕方がないところもあります。一方で、他の乗客たちは、何も知らないわけですから、見送りの人と5色のテープを引き合っているわけです。本土に行く乗客を家族が見送りに来ている人がたくさんいるのです。それでテープを引き合って6時間も経ちました。午後1時出航予定が、夕方の6時になっても船はまだ出ないのです。政府間で合意が出来ていても、船長が嫌だ、船会社も嫌だと。こんなこともありましたが、やっと船は出港しました。この船は、乗客を乗せて神戸に行くのですが、途中の島々に寄港してお客を乗せたり、貨物を乗せたりするのです。寄港する港には政府から予め、港の管理者のところに連絡が入ります。港に船が着くと検疫官と名札をつけた人たちがやって来ました。港に入るたびに、です。「どうですか？」と物見に来るのです。「らい」はどんななのかと、物珍しさで来たのです。見せ物にされたわけです。

船の一等客室というのは、サロンがあって、乗客たちが皆集まって食事をとります。綺麗なテーブルがあって、ご馳走がたくさんあるわけです。しかし、私たちは、そこを使うことが許されませんでした。一等客室の切符を持っているのに、です。私たちの食事は、大きなお皿とお盆とが一体になったようなものに、ご飯を入れて、船室までボーイさんが持ってきてくれました。船室の隣には、一等客室用の炊事場がありました。ボーイさんは、生徒の食事が済んで、食器を下げると、その食器を窓から海に捨てていました。それを生徒が見ているんですよ。こんなにまで差別されるのかと、泣き出す生徒もいました。港に着いた翌日に聞いた話では、生徒た

ちが使った一等客室の毛布やカーテンは全部焼却処分したそうです。国と国が取り決めて、生徒を送り出しても、実際にはそういう状態を見せつけられたのです。

そして伊波敏男が行った時、彼に船の切符を売った人がいます。彼のことを知っていて切符を売ったわけです。当然、その人はひどい罰を受けることを覚悟していて売ったのです。この人に、あとで話を聞いたら、港に船を着けた時も、出るときも検疫は非常にやかましい。必ず引っかかるだろう。そういう検疫のやかましいところに、こんなにひどい子どもを送り出す。それをあえてやってくれた人がいたわけです。だから、私は、偉い人がいるものだ、そして助けてくれるものだ、とつくづく思いました。

野球とボーイスカウト

1967年から山田という教師が着任しました。琉球大学卒の元気のいい先生です。柔道2段と言っていました。この時に初めて、澄井校には男性の先生が着任して来たのです。それまでは、みんな女性の先生でした。教員になるために、ここで働いていた。だから、1、2年働いたらすぐ転勤を希望する。そういう感じでした。そこに、山田先生という男性の先生がやって来ました。私は良い時期に来てくれたと思いました。彼は着任してすぐに、野球のチームとボーイスカウトを始めました。この先生は野球がとても好きだった。野球は子ども、特に男子は皆、好きですよね。好きだから早い時期からやりたいと皆、思っていた。ところが私は忙しいし、技術的によく分からないから、なかなか実行できなかった。そこに山田先生が来て、「子どもたちに野球を教えたい」という。私は「非常にいいことだから、すぐにやろう」と。「先生、すぐにやろうって言ってもグローブもバットもボールも必要ですよ」と。私は「そんなことは知っている」と言うと「じゃあどうするんですか」と。今はバットの1本も無いので、じゃあどうするか。私は「街に行ったら、いくらでもある。今すぐ俺の車に乗れ。すぐに買いに行くから」と。「先生、金はあるんですか？」「そんなも

の、一銭も無いよ。でもね、政府は物品を買うときに現金で買うことはしないんだよ。いつでも後払いだよ。だから遠慮することはない。金のことは、俺が引き受けるから」と言いました。その時は、どうせ今日はお金を持っていないし、支払いをしないのだから、質の良いものから欲しいだけ遠慮しないで選べばいい、ということを考えていたのです。山田先生は「本当ですか！いいんですか、いいんですね？」とちょっと遠慮しながら、選んでいました。あとで、金は何とかね、と。同時にユニフォームを子どもたち一人ひとりのサイズに合うように作らせました。そのユニフォームは、いま、愛楽園交流会館に展示してあります。これは子どものサイズにあわせて作って、子どもにあげたのですが、その中のひとりが、ユニフォームを全部集めて保管していました。そして彼は、愛楽園交流会館ができると知ったので、それを全部洗濯屋に出して、綺麗に畳んで、これを展示してくれと持ってきたのです。大変ありがたいと思っています。この時のチームのひとりです。

この頃、ある男子生徒が入って来ました。中学１年で背が低くて、園長さんは、この子は生まれながらに心臓の奇形がある、心臓奇形は危険だから無理なことをさせてはならないよ、と念を押されていました。私は「先生、無理とはなんですか？本を１行読むのは、無理ですか？運動場を50メートル走るのも無理ですか？」と尋ねました。すると、園長は「そんなことは、患者のその時の状態による」と言われた。そんな返事ではわからないではないですか。そして、そのように言われながら小学校から中学校１年まで育ってきたのです。家では甘やかされて、育ったのです。そして、その上に「らい」です。極端に甘やかされて育ってきた。そうして、学校で私が数学と英語を教えるようになりましたが、英語の教科書の１節も読めないのです。中学１年の何月ころだったでしょうか、アルファベットが読めないのです。そこで、英語の１行を私が読んで、テープレコーダーに録音しました。そして、「明日の英語の時間が始まったら、一番最初に君にここを読ませるから、覚えておきなさい」と言いました。実際にテープレ

コーダーを準備して、「ここだけを何回も聞いたら、覚えるから、やれ」と、テープレコーダーと教科書を渡し、「明日の授業で、一番最初に君にあてるよ」と伝えたのです。その日が来て、彼に「さぁ、立ってここを読みなさい」と言ったところ、彼は立ち上がると同時にぶっ倒れたのです。私はびっくりして彼を担いで病院に行きました。そしてドクターから散々、叱られました。「無理させた」と。皆さんはどう思いますか。そして、その子どもは、その日の放課後、クラスの友達がユニフォームを着けて野球の練習をしている姿を木陰からひとりで一生懸命見ていました。私は「どうだ、君もやりたいか」と聞きました。すると、彼は嬉しい顔をして、「はい」と言うのですね。「よし、じゃあやれ」と。そして最初にバットを持たせて、思い切り打て、と言ってバッターボックスに立たせました。その時のピッチャーには、「こいつにデッドボールでも与えたら承知しないぞ」と言いました。だって、大変ですからね。デッドボールの当たり所が悪かったら、それこそ彼は死んでしまいますからね。そうしたら、ピッチャーはきちんとボールを投げられない。4回ボールを出したらフォアボールでしょ。フォアボールになったら、1塁に出なくてはならない。そうしたら彼は喜んで、塁に出られたということで1塁に立ったのです。嬉しくて身震いしているんです。生まれて初めてのことだから。そうしたら、次のバッターがドカンと3塁打を打ったのです。大きいのを打ったので、彼は一生懸命ホームまで走ってきて、はぁ、はぁと苦しそうにしている。「苦しいか？」と訊いたら、彼は「嬉しい」って言うんです。英語を読ませたら、ぶっ倒れて「無理なことをした」。しかし、野球で1周走ったら「嬉しい」と喜んでいる。これは無理じゃないんですね、倒れないのですから。このように子どもへの接し方は、本当に難しいと思いました。その後、彼のユニフォームを作ってあげました。そしてのちに心臓の手術治療のために、九州の大学病院に行き、3年後に戻って来ました。もう大きな青年になっていて、私は人間というのは、悪いところをとって、治したらここまで成長するんだな、とつくづく思いました。さらに、彼は「先生、また自分をこの学校に

入れてくれ」と言いに来たのです。「なんで？君はもう歳も進んでいるし、今からでは入れないよ」と言いました。彼は学籍を九州の熊本に移し、中学校の卒業証書なども既に持っていました。しかし、彼はさらに「お願いです、僕は先生じゃ無いと教育しきれないはずだから。僕は先生に一生懸命ついていくから、勉強を教えて下さい」と言い、座り込みを始めてしまったのです。これには困ってしまい、「よし、じゃあ君は明日から学校へ来なさい」といって、それから受験勉強を教えました。その彼は、先週の土曜日、卒業生が10名くらい愛楽園に集まった時にも来ていました。それで、ここの浜でキャンプをしていました。彼らは、毎年夏にキャンプに来るんですが、どうも私が不自由になってきたから、私のために来ているかもしれません。彼らには、ここの浜は、思い出の浜だ、ということです。彼は、離島からわざわざ来て、キャンプに加わります。これも子どもの頃に野球をやっていたからだと思い、野球をやって良かったなぁと思っています。

同時に、その年にボーイスカウトも作りました。園長先生を委員会委員長として、校長先生を団長、そして山田先生を隊長にしたのです。ボーイスカウトは、キャンプなどすることで有名ですよね、ここでもキャンプをしました。キャンプのやり方などを教えたのですよ、ボーイスカウトの活動を通して。ボーイスカウトのユニフォームやキャンプ道具など準備するのは大変でした。また当時、沖縄のボーイスカウトの所属はアメリカだったのです。占領下なので、本土のボーイスカウトとは違って、籍はアメリカでした。だから事務連絡などで、しばしば米軍基地に行くわけです。キャンプする時も基地内の兵舎の中でアメリカ人の子どもたちと一緒にキャンプをしました。園長先生も校長先生もみんな同じボーイスカウトのユニフォームを着けているわけです。すると、米軍の部隊の入口では、ボーイスカウトの服を着ていれば、兵隊さんが敬礼をして通してくれる。子どもたちは、普段は「らい」という扱いを受けていました。しかし、米軍基地では、将校さんなどが大切に扱ってくれました。そんな中でアメリカの子どもたちと合同でキャンプをしたのです。またテントの中に、園長も校長

も子どもも一緒に寝ます。食事も子どもたちが飯盒（はんごう）で炊いたものを皆で分けて食べました。自分たちが作ったご飯を、園長や校長と同じものを、同じ場所で食べるのです。分け合って食べる。こうしたことが、他の療養所でできたでしょうか？ボーイスカウトをやっていたからこそ、できた体験ではないかと思っています。

そして、色々な大人が技術的な指導をするために、キャンプに来ました。キャンプで歌を指導するために来たりもしました。その人たちが、みんな「らい」を理解して帰っていきました。そしてアメリカ軍の部隊でも、今月缶詰が余ったよ、ボーイスカウトのキャンプに使いなさいね、と持ってくるようになりました。あるいは自分の部隊を見学させるから見に来なさい、とバスを持って迎えに来たりもしました。見学は1日がかりで部隊の中を回り、昼食は兵隊と一緒に同じものを食べさせてくれる。こういう経験は、ここの子どもたちにとって、初めてのことです。見たことの無いような、料理、食事マナー。それらを経験させるために、何度も呼ばれて行きました。

ヨットで海に出る

次第に生徒たちが減ってくると、次に学校のクラブ活動とか、部活とか、そういったものをどうしたらいいだろうか、と毎年、考えました。そして、生徒の人数、性質、そして好みなどを考慮してヨットを作ることを考えたのです。生徒たちは、陸上では閉鎖された社会の中にいます。愛楽園という小さい区域に日常的に閉じ込められています。欲求不満が出やすいわけです。ところが、海は、どこよりも広いですよね。だから海を教えたいと思ったのです。それから沖縄では、どこの子どもでも同じだと思いますが、夕方になって海に泳ぎに行きます。すると子どもたちを直接、世話をしている少年少女舎のお父さんやお母さんたちは、子どもの安全のために「泳ぎに行っては危ない」「あれをしては危険だ」「これをしてはいけない」と言うわけです。子どもたちは、泳ぎたいですよね。海に行って遊びたいのです。

しかし、お父さんやお母さんに見つかったら叱られる、だから見つからないようなところで泳ぐ。でも泳いだだけでは面白くないから、筏(いかだ)を探して、筏につかまって泳いだり、遠くに行ったりしていました。このような状況をみていて、私は安全な舟を作って、みんなが見ている前で海に出て行こうと考え、ヨットを作り出したのです。実は、この時、私はヨットを作ったことはありませんでした。ですから国体で使用するヨットの規格を調べ、図面を引き、材料や帆を調達したのです。製作には工作の時間を使いました。子どもたちは、今までの授業とはうって違って、興味をもって積極的に取り組みました。私は、作る中で、もし間違ったら、「先生、間違えた」と言いなさい、と最初に言いました。「先生を誤魔化したらいかんよー、皆と共同で棺桶を作っているわけではないからねー」と。そうすると、子どもたちも真剣です。間違ったら自分たちが死にますからね。私も生徒も一緒になって命を懸ける舟をつくりました。そして試行錯誤を重ねながらも 10 月には見事なヨットが作り上がった。そして、最初に子どもたちにヨットの操作方法を教えました。ヨットの操縦は、操舵だけではなく、乗員が全員で体重移動をしなくてはなりません。操作方法を教えるときには、色々な大人たち、ヨットが好きな人やヨットの資格を持った人が指導に来てくれました。やがて生徒たちと大人の付き合いというか、関係ができてきました。普通、中学生というのは、よその大人と余り話をするのが得意じゃない。なかなか話ができない。しかし、この子どもたちは、そうではなくて、自分の親以上に親しい大人ができたりした。その大人の中には以前、立教大学でチャプレンをしていた大郷博さんも来ました。僕も乗せてくれーって。そして彼はここでヨットを覚えて、自分でもヨットを買ってしまった。学校の先生も、今度の日曜日、僕もヨットに乗せてくれ、と言ってきた。ヨットは、愛楽園の裏の浜から海に出し、伊江島あたりまで走らせました。

ところで、ヨットに乗るときは、船長を任命します。今度の日曜は誰々が船長だ、という感じで。それは、船長はヨットの全責任を負わないとい

けない。乗っている人の安全を守らなければいけないからです。あるとき、先生が、「次の日曜日、ヨットに乗せてくれ」と言いました。この日の船長の生徒は、先生に「舟に乗ったら、僕に絶対従うんだよ」と言うわけです。実際、少し波が強くなったら、あれやれ、これやれ、って船長の生徒が先生に命令しているんですね。先生は、「覚えとけよ、俺の授業の時間、難問だしてやるから！」と言ったりもしていました。また校長先生は、魚やイカが食べたくてしょうがない。ヨットに乗る生徒に、「あれ食べたいな、これ食べたいな」と注文すると、生徒は、「じゃぁ釣ってきてあげるよ」という和気藹々とした学校でした。

澄井小中学校の閉校

いよいよ生徒の数が少なくなって、1980年に学校を閉鎖することになりました。愛楽園にある澄井校の生徒は、最初からいたわけではありません。昔から愛楽園にいたのは、大人であり、今はおじいさんやおばあさんになっています。生徒、すなわち子どもは、後から入園して来たのです。これは、子どもたちに病気を感染させた人が、最近まで社会にいたということでもあります。そして澄井校に通う子どもが少なくなってきたということは、その社会に子どもに病気をうつす人がいなくなったとも言えるでしょう。琉球政府立澄井小中学校の児童生徒数の推移は、このような観点から見ることもできると思います。私は、この澄井校に24年間勤務していました。普通、公務員は3年で異動ですが、私は閉校までの24年間勤めました。子どもたちと関わってきて思うことは、子どもが小さいうち、小学校1年生前後、に愛楽園に入園してくるケースが幾つもありました。そういう子どもは、その時から実際の親や兄弟姉妹と離れて、ひとりでここで育っていくわけです。その中で大人や年長者に嫌われないで、いじめられないで育つ子と、散々いじめられて育つ子と、違いが出てきます。何が影響するのだろう、と考えました。日本には“三つ子の魂百まで”という言葉があるけれど、3歳から4歳、その時の教育が

しっかりしていると、親を離れても他人に可愛がられて育つことができるんだと思いました。ですから今でも、私は保育園、幼稚園などに何らかの形で関わっています。皆さんも、小さい子どもをしっかりと育てることができるような社会作りに協力されると良いと思います。

それから、祈りの家教会司祭の津留孝夫先生が１週間くらい前に私の家に本日皆さんの前でお話してくれとお願いに来ました。津留先生は、お父さんが愛楽園の眼科医だったので、官舎で育ったわけです。すると、小学生の頃、この地区を通るだけで、「お前は『らい』の協力者の子どもだ」と散々言われたそうです。迫害を受けたひとりです。また私には娘がいます。今看護師をしていますけれど、彼女も周囲から迫害された、差別を受けた被害者のひとりだ、というのです。

私自身の澄井校の経験からも、人が人を差別することが無い社会が一日も早く出来あがればいいな、と思います。

写真３　澄井小中学校之碑
当時使用された授業鈴と共に
校舎跡地に建立された

写真４　碑文
校歌２番が刻まれている

（ひが よしゆき　元澄井小中学校教師）

講演日時：2014 年 9 月 4 日　10:00 ～ 12:00

場所：愛楽園　日本聖公会沖縄教区「祈りの家教会」

［付記］

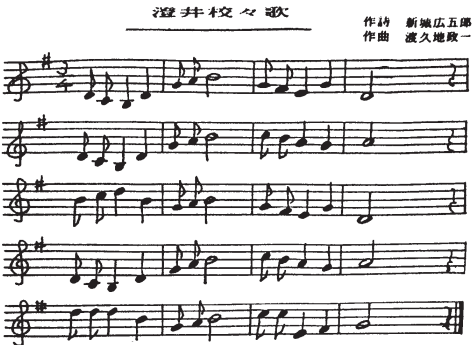
澄井校々歌

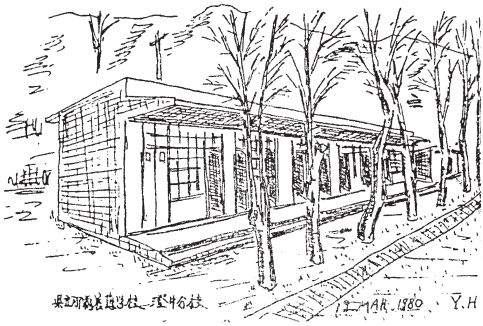
作詩：新城広五郎　作曲：渡久地政一

1. 丘には百合の　花咲きて
運天港に　かげうつす
ここ景勝の　島影に
愛と光の　照りみちて
たてる我らが　学びやよ

2. 希望と自信　朝夕に
伝えてひびく　森の鐘
友よ手をとり　励まして
雨のあしたも　風の夜も
学びの道に　いそしまん

3. まっすぐに伸びる　若竹の
ひにひに強く　たくましく
育ちて我ら　もろともに
新しき世に　尽くす身ぞ
前途輝く　朝ぼらけ





澄井校校舎
画：比嘉良行